

ゲニウス・ロキの微笑み

小黒 康正

坂本彩希絵さんは何かに取り憑かれている。5年前の2012年に振興会奨励賞を受賞したときも、この度、振興会賞を受賞したときも、私はそう思った。九州大学文学部の独文学研究室でマンを研究対象に選んだ時点から、坂本さんは「ゲニウス・ロキ」の憑依を受けているのかもしれない。

坂本さんは、玄界灘の潮風に吹かれながら、池田紘一氏の薫陶を受け、浅井健二郎氏の講筵に連なり、私の指導も受け、併せて助教も勤めた。考えてみれば、九大独文は、進取の気象に富みながらも、「秘奥伝授の間」でもある。マン文学が今なお論ずるに値するのかなどと問うのではなく、逆に、今の時代がマン文学を論ずるに値する時代なのか、あるいはそもそも自分がマン文学を読むに値するかと問うことを、私も坂本さんも教わった。

坂本さんは、2012年の長崎外大着任後も、定期的に九大に戻ってくる。トーマス・マン研究会に参加するためだ。以前は初期のマン作品を扱っていたが、研究会で多くを学ぶ中で、次第に取り憑かれたように『魔の山』を扱う。その成果が、日本独文学会機関誌153号に寄稿したドイツ語論文である。私はマン特集の責任者であったので舞台裏をよく知っているが、同論文は審査の段階からマン研究で著名なドイツ人査読者から高い評価を得ていた。

坂本さんは、件の「奥義」を解しながら、常に真摯な姿勢で研鑽を積み続けている。坂本さんがある種の錬金術的高揚を果たしたとき、私は「土地の守護精霊」の微笑みを垣間見たような気がした。

(おぐろ やすまさ／九州大学教授)